

氏名（本籍）	シロ	キ	アサ	コ	白木麻子（東京都）
学位の種類	博	士			（美術）
学位記番号	博	美	第	219	号
学位授与年月日	平	成	20	年	3月25日
学位論文等題目					〈作品〉軌の景色 〈論文〉「ゆらぎ」の風景
論文等審査委員					
（主査）	東	京	芸	術	大
	学	大	学	教	授
					（美術学部）
（論文第1副査）	田	中	一	幸	
	佐	藤	道	信	
（作品第1副査）	増	村	紀	一	郎
	三	田	村	有	純
（副査）	橋	本	明	夫	
（ 〃 ）					

論文内容の要旨)

ぼんやりと眺める景色の中から、いつもと違った見え方をして目にとまる景色がある。いつもそこにありながら、光の向きや風の強さ、歩くスピードなどの外的な要因や、経験や感情といった内的な要因によっても視点は変化する。きっかけとなる視点に触発され、時間的な枠を越えて呼び起こされる記憶や感情。時には自分自身さえも忘れてしまっていた様々な情景が想起される。視点に限らず私達は、五感を介して出来事を経験し、記憶として蓄積してきた。本来記憶とは、脳の働きによって行われるものであるが、私達は感情と折り重なった記憶を心の内にあるものとして、自分を取りまく環境の中で時間と共に丸みを帯びたり、時には尖ったりといった変化するものとして蓄積している。私の制作は、そうした事柄を「風景」という言葉を手がかりにして、視点と連想される事柄との対照の中で形を捉えていく。

風景を捉える概念は多様である。風景と言ってもいわゆる山や川といった眺めや、現代の都市環境の下、人工物の溢れかえった生活環境から思い描かれる風景など、知覚できる有形で現実的な風景、あるいは目には見えないが頭の中にイメージとして形成され、想起できる理念的な風景など、思い描くものは様々である。多様化する表現や風景に対する捉え方の中で、私はいかなる風景を木という素材によって空間に描けるか。また、様々な要因によって変化する視点をどのように拾い上げるか。それは私自身の中にある尺度が重要な鍵となる。

私の捉える風景とは、視覚的に捉えたものが、過去の経験を通して蓄積された記憶との対照の中で、何か不確かな感覚を含んだズレを引き起こすことに端を発している。内的に取り込まれた風景が形を捉える際、素材や道具などにも関わりを持ちながら、またその中で更なる未知性を含んだ形として形成される。たとえ現存するものから触発されたものであっても、私という支持体がなければ自立することの出来ない、心の奥底に深く沈み込んだ内なる風景であり、それらを空間に存在させる事によって、鑑賞者の感覚を辿ってなにかしらの記憶を呼び起こすものでありたいと考えている。

こうした中で、私が形を捉える際に尺度としているのが、「ゆらぎ」である。「ゆらぎ」とは本来、物理学で言う決定論的予測からのズレを指すが、本論文では「心が揺らぐ」「気持ちが揺らぐ」といった、生物にとって生きていることの証でもある予測不可能性を含んだズレを指す。それを、二元論的な判断からではなく、物事の両極を視野に入れながら、様々な出来事と柔軟に向き合う姿勢、あるいは緩衝地帯に立ってものを見るような姿勢を、造形に於ける「ゆらぎ」と定義した。また、素材である木材を通

して「ゆらぎ」を物質的に視覚化することや、制作過程での非視覚的な心理の中にそれを見ることを試みた。「ゆらぎ」とは、こうした、目に見えるものと見えないものを繋ぐ役割を果たすものである。また、造形の中に発生し、取込まれるズレの存在によって、物質に変換された内的な風景が、作品を取り巻く周囲との互換性を持つための、余白をつくる。

私は、本来視覚で捉えることのできない無色透明な風のような存在である「ゆらぎ」を、間接的に景色に依存させることで、リアリティーを持って体現することが出来る、“風の景色”を作りたいと考えている。すなわちそれが、私にとっての「風景」である。身の周りにある景色から、目には見えない不在の存在を心の内に見る時、眼の前にあるものよりも色鮮やかで美しい「風景」が見える。

物事を捉える尺度としての「ゆらぎ」を、作品を作る姿勢の中に取り込むことで、複雑なものを巨視化することで見えてくる景色の稜線のように、物事を見つめる新たな視点を得ることを試みた。

本論文は大きく四つの章によって構成される。

第1章では、「ゆらぎ」がどのようなものであるかを、生活の中でのいくつかの事例を挙げながら説明すると共に、私自身の造形に於ける「ゆらぎ」を定義した。また、視覚的なきっかけによって心の内に取り込まれたものが、蓄積された記憶との対照の中でズレを起こし、未知性を含んだ新たな内的な風景を形成することを述べながら、そのズレと「ゆらぎ」の関係性について述べた。

第2章では、内的な風景が、素材や道具などの媒体によって可視化する行程について述べた。その際、素材である木材と道具によって刻み込まれる痕跡に、視覚的な「ゆらぎ」、非視覚的な「ゆらぎ」が存在することを作品から検証し、またそれらが導く形と私自身の自発的なやり取りによって、内的な風景が実在性を伴っていく行程を述べた。

第3章では、私自身と様々なものの関わりによって外部に開かれた作品が、再び個人のものとなることを述べた。ここでは形を持った作品の中に、不在の空間を作ることによって生まれる、視覚的に捉えることの出来ない新たな風景について述べた。

第4章では、自作品「軌の景色」を通じて、制作の中で選り出す形や出来事が、潜在的に日本人独自の文化や風土への意識に依ることを述べ、またこうした尺度としての「ゆらぎ」自体が、土地に根付いた精神性であることを述べた。

終わりに、私がものを作るものの背景として「ゆらぎ」の存在を明らかにすることで、自らの制作の新たな展開への可能性について述べ、まとめとした。

本論文によって、造形に焦点を当てた木工芸としてのあり方が、目には見えない感覚的な部分だけに傾いた手探りの造形としてではなく、制作の背景的なことを知ることで、何かしらの実感を持ってこれからの制作に繋げて行くことを目的とした。